

次の文章を要約し、次に要約をふまえてあなたの意見を書きなさい。要約と意見は、それぞれ400字以内にまとめなさい。

戦前の日本語では、理性的な討議を経て吟味される「輿論<sup>よろん</sup>」と、大衆の情緒的な雰囲気<sup>せ</sup>を指す「世論<sup>せろん</sup>」を使い分けていたと言われていました。しかし、現代はメディアの使える漢字の制限もあり「世論」としか書けない。こうして「輿論」の世論化が進んだ結果、世論が感情的になりがちだというのは一理あります。

討議は「異なる意見の持ち主がいること」が前提ですが、雰囲気は「これ以外の感じ方<sup>※1</sup>はあり得ない」といった画一化に陥ることが多い。だから世論は、輿論とは違って、ポピュリズムの温床になりがちで危険だ、との批判も繰り返されてきました。

一方コロナ禍は、これとは別種の「世論の危うさ」を示しました。世論は情緒、気分であるがゆえに、瞬間的には人々を画一化<sup>しんきろう</sup>するかに見えても、蜃気楼のようにすぐ消えてしまう。正反対の内容に急変することさえあります。

ワクチン接種が順調だよ、という報道の後なら「五輪もできるかな」となる。でも、打ち過ぎてワクチンが不足気味と言われると、「五輪はありえない」に変わる。1回目の緊急事態宣言下では、世論も「自粛が絶対の正義」だったのに、4回目になると飽き飽きして「従ってられるか」と無視する。

なぜこうなるのか。いくら気分で一色に塗りこめても、必ず一定数は少数派がいるからです。五輪にもともと価値を感じない人、自粛がうっとうしい人。世論は一時的な雰囲気<sup>※2</sup>で彼らの発言を「封じていた」だけだから、空気が変われば異論が出てくる。

きちんと討議をしておけば、こうした情勢の変化の際、両者の間で「どこまで譲ろうか」という歩留まりを見いだせるはずですが。しかし情緒のみに依存していると、世論は途中で止まらず、一気に逆の極端まで行ってしまいます。

たとえば「タピオカはおしゃれ」というのは情緒ですから「もうダサイ」となった瞬間に誰も飲まなくなる。いまの政治ではこれと同じことが起きています。怖いですね。

タピオカの流行に一役買ったインスタグラムが典型ですが、いまはオンラインでも言葉以上に画像や動画でつながる時代です。その副作用で「意見は違うけど一目おく」とか、「参考にできる部分はする」といった歩留まりの姿勢を取りにくくなっている。

言葉で書かれた評論なら「この箇所には同意、それ以外は疑問」といった反応ができる。でも、「推し」のアイドル本人が動画を流す際には、「見るか、見ないか」の二択になりますよね。私たちが距離をとるべきは、あたかも「言葉は要らない」かのように錯覚させる、疑似的な親密さの方でしょう。世論に対して輿論を回復する鍵も、そこにあると思います。

(與那覇 潤「耕論 討議尽くさず情緒で二択」朝日新聞 2021年7月17日朝刊による。一部改変)

- ※1 人民主義、あるいは民衆主義。人民、民衆の要求や指示にもとづく運動。大衆迎合主義の意味でも使われる。
- ※2 本来は、使用原料に対する製品の出来高の割合などを言うが、筆者は条件を明確にすることによる妥協点、妥協点を見出そうとすること(歩み寄り)の意味で使っている。